金魚の夢

清水義範

金鯱の夢

清水義範

集英社

金鯱の夢（きんこ・ゆめ）

一九八九年七月二五日　第一刷発行

著　者　清水義範（しみずよしのり）

発行者　若菜　正

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号　一〇一―五〇

出版部（〇三）二三〇―六一〇〇

電話　販売部（〇三）二三〇―六三九三

製作課（〇三）二三〇―六〇八〇

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1989 YOSHINORI SHIMIZU

Printed in Japan ISBN4-08-772705-X C0093

金鯱の夢＊目次

第一章　運命の子　7
第二章　大坂炎上　29
第三章　江戸夏の陣　50
第四章　江戸黄門漫遊記　71
第五章　元禄名古屋デザイン博　92
第六章　八十日目（やっとかめ）忠臣蔵　113
第七章　江戸の陰謀　133
第八章　風来山人夢物語　154

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九章　望郷絵師　175
第十章　昼寝清四郎無茶控　196
第十一章　寅次郎と幸之助　217
第十二章　御存知大曾根天狗　237
第十三章　夢の終り　260（一般用）
第十三章　大いなる夢　260（愛知県人用）
あとがき　291

装丁　山藤章二

金鯱（きんこ）の夢

第一章　運命の子

1

うちの殿さも、このごろちょっと違っとれせんか、と長浜城の奥で、寧々は思うのだった。殿さとは、夫の羽柴藤吉郎秀吉のことである。

昔からしょっちゅう言っとりゃあた通り、確かにえらい出世はしやーたけどなあ、と彼女は思うのだ。

そんだけどなんだしらん、このごろはちょっと変ってきてまったでいかんわ。

天正十年（一五八二年）の春、というその時、彼女の夫は仕事で備中の国へ出張している。仕事の内容は、大変な重大事である。織田家の毛利攻めの総大将として、中国を次々と平げていく役目を果たしているのだ。昔を思えば、信じられないような大きな任務であった。

景気のええ夢みてゃあなことばっか言っとらっせる人だったけど。

本当にその言葉通りに出世してしまったのだから我が夫ながら偉い、と寧々もそのことは認める。

彼女が藤吉郎のところへ嫁いできた時には、その猿に似た小男は雑居長屋に住んでいる草履取りの身分だった。まだ武士でもない。

それが、あれよあれよという間に士分になり、一軍の将となり、城持ちの大名になり、織田家の重臣の一人にまでなり、名まで羽柴という偉そうなものになった。その上、筑前守という官称までもらっている。

ひとつには、織田の家風というか、もっと正確に言えば上様のご気性のため、と寧々は思っている。主君である信長が、有能な者はその出自を問わずどんどん重用して使う、という人間であったため、思うさま働くことができ、働いただけ出世できたのだ。

しかしやっぱり、うちの殿さもようやりゃあした、と彼女は思う。ほんとに、並の人とはてんで違うでかんわ、と夫のことを誇りにも思うのだ。

秀吉は仕事の内容をこまごまと妻に話してきかせるタイプの男だった。今度こういうことをやる。みんながやってできーせんかったことだが、わしにはできるがや。こうやったりゃそんなもんあっという間だでかんわ。まかいといてちょ。

そんなふうに、明るく自慢話をする。そして実際に、言っただけのことは見事やってのけるのだから並の人間ではない。この人は天才だねゃあか、と何度も思わされてきた。

寧々は夫のそういう自慢話を目を輝かせて聞いてやる妻だった。ええがね、ええがね、お前さならできるて、と相槌をうって夫を乗せる。性格が明るくて、頭がいいのである。その上気取りがなく、ものを平明に見る目を持っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

そういう平明な目を持った彼女だからこそ、最近出張続きで留守がちな夫について、このごろどうも、と批判的な考えもできるのであった。
寧々が不満なのは、秀吉が出世の虫にとりつかれているように思えることである。
ほんとに最近のあの人、見事に仕事をやって上様に褒められてゃあということしか考えとれせんみてゃあだぎゃ、と思うのだ。
もちろんそれが悪いことでないのは寧々にもわかっている。男なら誰しもそういう意欲を持つものだ。出世欲を持ち、しかも本当に出世していくのだから、夫は申し分のない男と言うべきかもしれない。
だが、彼女はちょっと違う感想を持つ。
出世だけが人生だいうのは違えせんか。
と思うのだ。
そのことだけのために生きとるだったら、仕事たわけ、いうもんだぎゃ。
そう思うと寧々は、我ながらうまい表現だと顔をほころばせた。
そう、仕事たわけ。
たわけとは、馬鹿という意味の尾張の言葉である。
仕事ができる人間だいうことと、仕事たわけとは違うがね。
この寧々の不満は、夫が家庭を顧みない人間だという次元のことではない。むしろそういう意味でなら秀吉は、感心してしまうほど気のまわる男だった。今でも城へ帰ってくれば寧々とこまごま話を

し、優しい気遣いもしてくれる。お前の妹んとこへもこの菓子分けて持ってったれ、とか、親父さん、元気でやっとらっせるか、などと親戚のことまで気にかけてくれるのだ。

寧々が考えるのは、人間としての器量の問題である。出世していくことだけが人生の喜びであっては、つまらない、と思うのだ。

なんだしゃん寂しいがね。

そういう人間観からくる不満だった。

このところあの人は、ちょっと上すべりに調子に乗りすぎているのではないか。

寧々はそんなことをぼんやり考え、それから、もうひとつの不満のほうへ考えを巡らせた。

それともうひとつ、あの色好みはどうにかならんのきゃあ。

もともと女には目のない人であった。ちょっとでも美しい女を見ればどうにも手を出したくて我慢のできない人間なのである。だからこれまでにもさんざん女遊びをしてきた。そしてこのごろ、特にそれがひどいのだ。

寧々の腹立ちの半分は嫉妬であっても、もう半分はそうではなかった。女遊びをしながらも、秀吉は寧々を粗略にするわけではないのだ。正妻として重く遇し、頭が上がらないという恐妻家の態度でいる。むしろ寧々に甘えて、おれの病気だから見逃してくれ、というような機微でいる。

だから妻としての誇りは傷つけられなかった。困った人だ、とあきれてしまうしかないのである。

寧々が不満なのは女遊びそのもののことではなく、その質の問題であった。

やり方がちょこっとみっともねゃあことねゃあか、と思うのだ。

秀吉には、高嶺の花、というような女性を異様なまでに好むところがあった。高貴な筋の娘、などというものに無上の憧れを抱くらしいのである。出自の賤しさから来る好みなのであるかもしれない。

そして近ごろは、自分も出世した。そういう女に手が届くようになった。そのことによる色好みが、手がつけられないほどにまでなっているわけだ。

自分の出世を女で確認しているようなものではないか、と寧々は思ってしまう。

それちょこっといじましないきゃあ、と思うのだ。

うちの殿さはどんな高貴な女だろうが、問題にならんぐりゃあの天才だがね。そう大したこともねゃあ女で喜んどったらみっともねゃあことないきゃあ。

そういう不満を寧々は抱くのだ。

彼女は軽くため息をついて考える。

それもこれも、と二つの不満を並べて、

うちらに子がねゃあでかなあ。

盛んに女遊びをするのだが、秀吉はどの女にも子を産ませることはできなかった。自分には子種がないのだ、と諦めている様子である。

やっぱり子がねゃあと、人間どっか安定せんのだろうか。それがあの人の唯一の弱点なのかもしれんなあ。

寧々は寂しくそう思わざるを得ない。

2

織田信長は多忙である。

この天正十年のころ、彼の版図は東海、近畿、北陸、甲信に及び、日本のほぼ三分の一を切り取ったと言ってもよかったが、まだ天下には強敵が多く残っていた。

中国の毛利に対しては、信長は秀吉をしてこれに当たらせている。四国の長曾我部には、三男の信孝に丹羽長秀をつけた。そして関東には滝川一益を派遣し、北陸の上杉に対しては柴田勝家を配している。その他、同盟関係にある三河の徳川家康を接待したりと、休む暇もないほど忙しい。

だが信長は、疲れた様子もなく精力的に日々を送っていた。この年、四十八歳である。

安土城の奥で、濃姫と水いらずで四方山の話などをする余裕すらあった。この気の短い男が、美濃から来たこの妻に対しては存外優しいのである。お濃は頭がよく、信長はその点で妻が気に入っていた。仲のよい夫婦だと言ってもよかった。

「きのういりゃあたあの人は、どこの人だったの」

という調子で濃はものを言う。美濃の言葉と尾張の言葉はよく似ており、夫婦二人だけならば双方とも気楽に郷里の言葉を使った。

「そんなことぐりゃあ、めっそ（当てずっぽう、目分量などの意）で分からんか」

「お客が多すぎて分かれせんが」

「だちかん（埒が開かぬ、の転。だめだ、の意）なあ」
そんな会話をしているうちに、突然信長が大声で笑った。濃の言葉がおかしいというのである。
「なんだその言葉。どえりゃー（ものすごく）田舎臭あなあ。美濃弁まる出しだがや」
他国者が二人の会話を聞いていたとしたら、この信長の言葉は奇異に思えるだろう。二人はほとんど同じような言葉で話しているのである。
「よう言うわ、そんなこと。田舎臭あのは同じだが。ひとのこと言えた柄きゃあ」
「言えるがや、美濃よりは尾張のほうがひらけとるぞ」
「とろくせゃあこと言わんといて。尾張の清洲いったらど田舎だが」
「めちゃんこ言うな。尾張は美濃よりよっぽど町だぞ」
「そんなことねゃあ。美濃のほうがひらけとるに決まっとるがね」
「なんでだ」
「美濃のほうが尾張より京に近いが」
他愛もない郷里自慢である。もちろん二人とも、冗談とわかって言っているのである。
そんな話をしているうちに、人物談議になってきた。数ある戦国武将のうち、誰が最も有能であるか、という話である。もちろん信長自身は別にしてだ。
「生きとったら、信玄入道に決まっとるんだが」
と信長は言う。しかし信玄はもうこの世にはいない。
「上杉謙信も死ねゃあたなあ」

「あいつか。うん。あいつが雪ん中の男でなかったら、今のおれに代っとったかもしれん」
越後は冬になれば雪が深すぎて身動きがとれなくなる。それさえなければ京に上っていたのは謙信だったろう、と言うのである。
ではこれは、と、毛利、北条、長曾我部、島津などの名があがった。信長は短く答えていく。
「田舎者だ。時代に遅れとる」
「小物だがや」
「問題にならん」
濃はちょっと考えて、こう言った。
「ほんなら、三河殿は」
信長は一瞬考えた。しかしこの男の思考時間は常に一瞬である。
「家康か、あいつは律儀者だ。たわけかと思うほど律儀な男だわな。そこがあいつの底力なんだが、まあ、そこまでの男だろう」
結局、この世に信長に比べられる人間などいないという話に落ちつく。夫婦の間のざれ言なのだから、もちろんそれが正しい結論であるに決まっている。
濃は次に、織田の家臣の中では誰が有能かという話題を出した。あまり人物評などをうるさくやるのを好まないタイプの信長だが、この夜はよほど上機嫌なのか、その話にも乗った。
柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益、前田利家、などの名があがったが、信長はどれもそう高くは買わなかった。信長にとって家臣は道具であり、人物評をやる以前のものであるらしい。しかし濃が次の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c